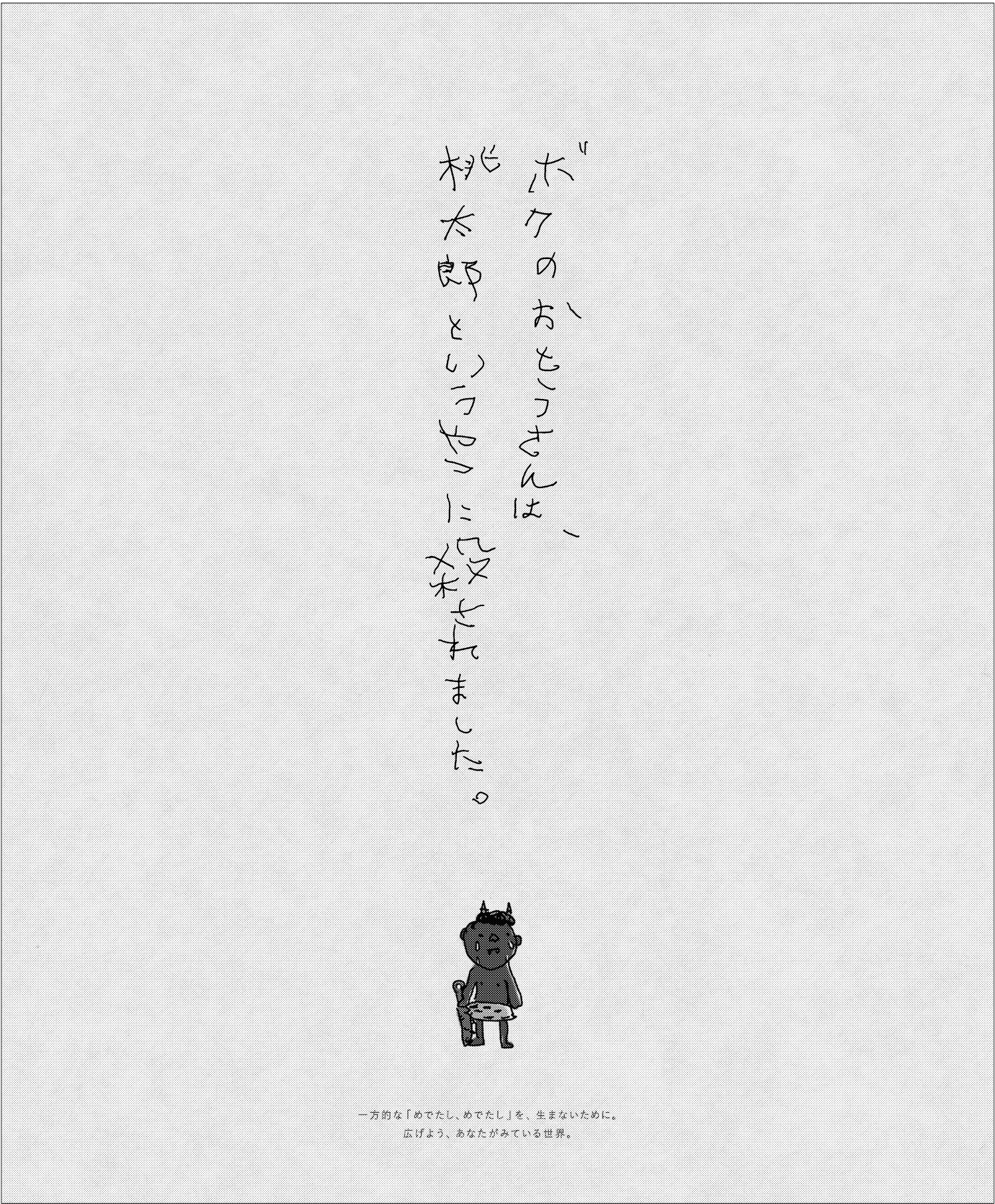


2013年度「新聞広告クリエイティブコンテスト」結果発表



優秀賞「いつも通り」



最優秀賞「めでたし、めでたし？」

OECD国民幸福度

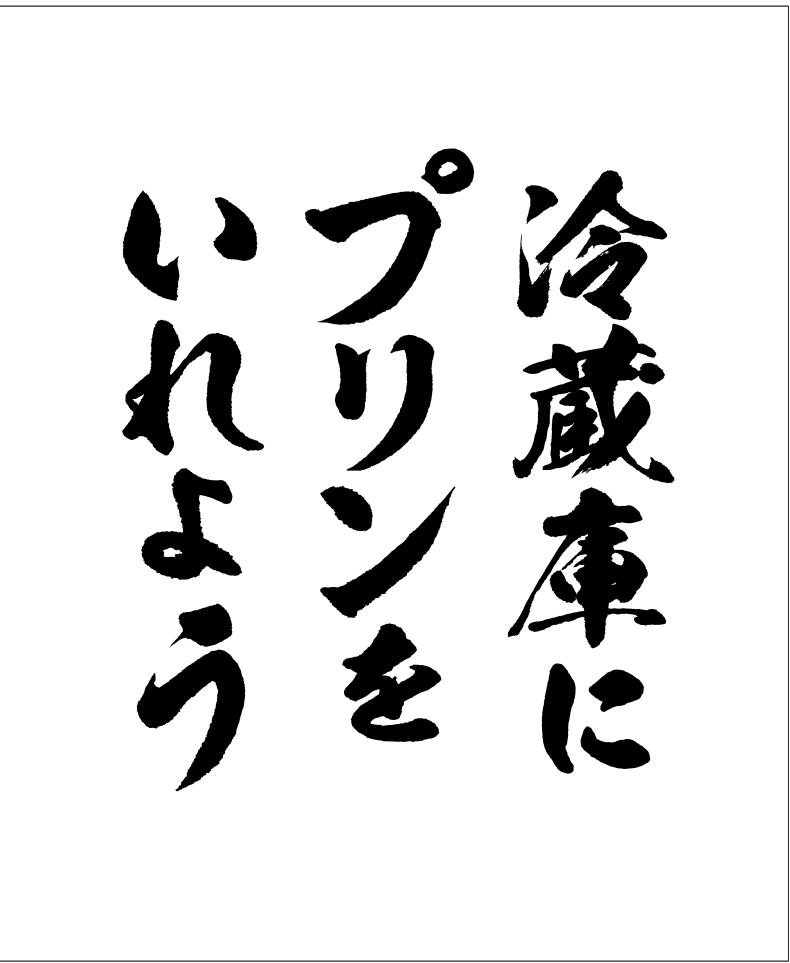
21位

オリンピック、
ワールドカップ
と同じように、
1位を目指して
盛り上がらないのは
なぜ？

学生賞「21位」



デザイン賞「しあわせはワンサイズです。」



コピー賞「冷蔵庫にプリンをいれよう」

日本新聞協会広告委員会は、新聞広告の活性化を目的に「新聞広告クリエイティブコンテスト」を実施しています。今年度は「しあわせ」をテーマに募集し、全国から1069作品の応募がありました。たくさんのご応募をいただきありがとうございます。クリエイターの副田高行氏、一倉宏氏、児島令子氏、佐野研二郎氏、服部一成氏、前田知巳氏と広告委員会正副委員長による厳正な審査を経て、入賞作品を決定いたしました。入賞作品は当協会ウェブサイト(<http://www.pressnet.jp/adarc/>)でもご覧いただけます。作品タイトルと入賞者は次のとおりです(敬称略、かつこ内は制作代表者の所属)。

○最優秀賞「めでたし、めでたし？」代表：山崎博司(博報堂)、C山崎博司、AD・D・I小畑茜○優秀賞「いつも通り」代表：田中龍一(読売広告社)、AD・D・I田中龍一、Ph佐脇充○コピー賞「冷蔵庫にプリンをいれよう」代表：遠藤誠之(アルファ・シリウス)、CD・C遠藤誠之、AD・D長瀬孝太○デザイン賞「しあわせはワンサイズです。」松下由希子(東京芸術大学)○学生賞「21位」代表：三宅宏明(山口大学大学院、共同制作者：油井美奈子 ※略号はCDクリエイティブディレクション、ADアートディレクション、Cコピー、Dデザイン、Phフォト、イラスト)

《講評》

・副田高行 審査委員長「何が「しあわせ」かは個々人で違い、言葉や形にするのが難しいテーマだったと思います。桃太郎に父親を殺された鬼の子どもの面を描いた最優秀賞の作品は、目にした誰しもがふと立ち止まって考えたいという点で、新聞協会の広告コンテストのグランプリにふさわしい、エッジの効いた作品でした。昨今、問題提起ができている広告が少ないように感じています。読者に新聞広告の価値を再認識してもらいたい意味でも、このコンテストには既存の価値観に二石を投じる役割を期待したいです。

・一倉宏 審査委員「形だけの幸せを考えた作品が多かった中、選考のふるいにかけてみれば、これだけの優れた作品が残りました。最優秀賞は、ただ面白いとか、ただ上手にまとまっているというのではなく、とがっているところがよいですね。優秀賞の「いつも通り」は、見上げる青空と街の構図に福島を連想させるを得ず、強烈なメッセージ性を感じます。コピー賞は、幸せが日常の中にあることを言い換えたコピーワークがなかなかのものでした。

・児島令子 審査委員「今の若い人たちは、生まれた時から低成長経済の中で生きていますが、日常の身近なことに幸せを見つけていると感じました。それを新聞広告に仕立てる際に、表現の仕方や視点の持ち方を工夫した、シンプルながら強い作品を選びました。最優秀賞は読み手の心に小石を投げるような作品でした。「いつも通り」の道路標識のバックにある青空は、3・11前の日本に戻りたい想いと戻ることの難しさへの暗示とも読める点がジャーナリストで評価しました。

・佐野研二郎 審査委員「今回初めて審査に加わりましたが、「しあわせ」からすぐに思いつくもの、例えば四つ葉のクローバーとか赤ちゃんといったステレオタイプのイメージではなく、どう見るか、という「視点の発見」が重要だったのではないかと感じています。逆説的な立ち位置から見えるものとして、最優秀賞の「鬼の子ども」が象徴的です。選外ですが、作者本人の病から見える風景をドキュメンタリー的に仕上げている作品があり、新聞ならではの表現として深く印象に残りました。

・服部一成 審査委員「幸せという言葉を発するのは、どこか気恥ずかしさを伴うものです。この気恥ずかしい「幸せ」をどう捉え、どう表現すれば読者に共感してもらえるのか、敏感に考えて作ったものが最後に残ったと思います。等身大の幸せをテーマにしたものがほとんどの中で、選外の作品に、社会的視野の広さを感じさせるものや、幸せの捉え方がユニークなのがいくつかありましたが、コピーやデザインが未熟で訴える力が弱く、入選に至らなかったのが残念でした。

・前田知巳 審査委員「昔「しあわせって何だっけ?」というヒットCMがあった。「しあわせ」という自分より大きな概念はど、人と共有するのが難しいものはないかもしれない。最優秀賞は、そういう「しあわせ」そのものの矛盾感、勝ち負け感を観る者の喉もとに突きつけるような作品だった。「広告制作者は、ある意味でジャーナリストであるべき」という見本だと思う。優秀賞の「いつも通り」と見比べてみると、より味わいが深くなる。「しあわせ」という状況は、常に「怖さ」と同居しているのだ。